

2014.11.29

夏目漱石の『三四郎』を精読する レジюме

- 三四郎が里見美禰子に感じた「矛盾」とは？ P29 P120 P183
- 菊人形を見に行く道すがらの乞食をめぐる会話について P113
- 三四郎の三つの世界 P80 P112 P225
- 広田先生の近代主義 P69 P113 P204 P260
- 広田先生の弁ずる「偽善」と「露悪」の道徳的価値 P137 P163-166
- 与次郎が広田先生の獵官運動をする理由 P130
- 「迷える羊」の意味 P126 P132
- 里見美禰子の宗教観 P184 P188 P278 漱石いわく「無意識の^{アンコンシヤス}偽善者^{ヒボクリット}」
- 里見美禰子は、誰のことが好きだったのか？ P149 P193 P215

(ページは、新潮文庫による)

正義の女神 ユスティティア (テーミス)



弁護士事務所に飾ってある「正義の女神像」は、秤で、善悪を図り、剣で強制執行します。

なぜ、目隠ししているかは、ゲーテ曰く、先入観にとらわれないためだそうです、

東大法学博士の長尾龍一さんは「正義の女神は売春婦だから、俗世の権力者に抱かれる」

という説を出しています。

善悪や、正義、不正というのは、難しい思想があって、副島隆彦さんいわく

正義というのは

1、神や宗教に関わらない 2、学問的事実に関係ない 3.俗世での判断である。

という暗黙の定義が、西欧ではあるそうです。

この世（俗世）の善悪と、神の国（信仰上）の善悪は違います。

この世（俗世）の善悪は、広田先生いわく、偽善と露悪しかありません。

偽善とは、形式上の善行です。形式なので、ためにする善です。

露悪とは、偽善を意識的に行うことです。意識的なので悪趣味です。なので露悪です。

神の国の（信仰上）善悪は

100匹の羊がいて一匹が迷ったら、その一匹の迷える羊をのために尽くす善です。

つまり、弱者救済の隣人愛の実践ですね。

これは、理想的ですが、俗世では、合理的選択ではありません。

三四郎も里見美禰子も、自分たちが「迷える羊」だという自覚があります。

三四郎は、都会の華やかな生活と、大学での修道士のような生活に矛盾を感じます。

この矛盾を、「迷える羊」という言葉で理解しています。

しかし、美禰子の『迷える羊』という自覚は、三四郎のそれより、深刻です。

彼女は、近代的な合理主義の考え方にどっぷり浸かっている、なおかつ

カソリックでありながら、俗世においては、封建的な見合い結婚をするという意味で、

正義の女神のように、目隠しされて、権力に抱かれ、俗世での結婚相手を選ばされて

生きていく妥協を、強いられています。

ここにこそ、彼女は、深刻な「矛盾」を感じている。

美禰子が『迷える羊』と自覚するのは、自分の信仰上の立場と俗世の立場の

矛盾を感じてしまう、知性があるからです。

この感受性を生んでしまう里見美禰子の知性こそが、

彼女のカソリック信者としての原罪であり罪悪感です。

それが、美禰子の「われは我が愆（とが）を知る。我が罪は常に我が前にあり」

（旧約聖書 詩篇第 51 篇）という、発言につながります。

三四郎はそういう美禰子の知性を漠然としか理解していません。だから失恋します。

しかし、夏目漱石のその後の作品の主人公たちは、友人を恋愛上の三角関係において

裏切ることで、罪悪感を現実のものとして受けとめざるを得ずに、苦しむのです。